

# 進学校出身の大学不本意入学者に関する研究

－大学志望度と評定に着目して－

竹 内 正 興

〔抄 録〕

本研究は、進学校出身者が非進学校出身者と比べ、大学不本意入学となるリスクが高いことを明らかにし、不本意入学者を出さないための習熟度別クラス編成のあり方を提案することを目的とする。

先行研究からの考察、ならびにアンケート調査による検証を試みた結果、進学校出身者は非進学校出身者と比べ、第一志望で大学に入学する割合が低く第二志望以下での入学になると不本意入学となりやすいのに対し、非進学校出身者は第二志望以下でも大学入学への本意度が高いメンタリティを持っていることが示唆された。

調査結果と考察より、本稿では、進学校出身者は非進学校出身者と比べた場合、自己選抜機能が働きにくいと考えられる点を踏まえ、進学校でのバンディング型の習熟度別クラスの導入による学業的能力における自己概念の修正機能の強化が、高校での自己の評定を前提とした納得度の高い志望校の選定を促進し、大学進学に際しての不本意感の抑制に寄与できる可能性を指摘した。

キーワード：不本意入学、進学校出身、大学志望度、評定

## 1. はじめに

### (1) 研究の目的

本研究は、進学校<sup>(1)</sup>出身者が非進学校<sup>(2)</sup>出身者と比べ、大学不本意入学となるリスクが高いことを明らかにし、不本意入学者を出さないための習熟度別クラス編成のあり方を提案することを目的とする。

### (2) 問題の所在

大学不本意入学については、岩井(1984)<sup>(5)</sup>の「平均して20%前後不本意入学者が存在している」、豊嶋(1989)<sup>(6)</sup>の「旧帝大で1割、地方国立大学では少なくとも2～3割の学生が明確な不本意感を持って1年次を過ごしている」、寺崎(2010)<sup>(7)</sup>の「日本の大学は不

本意入学、不本意学生だらけである」等の指摘にある通り、日本の大学には少なくとも大学収容力<sup>(8)</sup>が60%以下であった1980年代後半から90%を超える現在に至るまで、大学入学の門戸の広さに関わらず一定数の不本意入学者が存在することが明らかにされている。

大学不本意入学者が存在する要因としては、「18歳頃における一度限りの一斉受験という特殊な行事が、長い人生航路における最大の分岐点であり目標であるとする、我が国の社会全体に深く根を張った従来型の大学入試」<sup>(9)</sup>という中教審答申での言及や、国立大学入試の場合、複数の受験機会がありながら実質的には一度の大学入試センター試験の結果で受験校が決まってしまうという竹内（2014）<sup>(10)</sup>の指摘に見られるような入試構造からの問題点が挙げられるだろう。

一方で、梶田（1983）<sup>(11)</sup>が「周囲の人の『まなざし』の中で、自らが価値のあるものとされるためにこそ、つまり『貴種』として自他に見られたいがためにこそ、子どもたちは有名高校、有名大学を目指す」と述べるように、有名高校の中に張り巡らされたまなざしの中で、生徒たちは有名高校に入学したからには大学も有名大学（貴種）を目指さなければならないという価値観に縛られ、有名大学に進学できなかった場合、入学する大学に対して不本意感というメンタリティが発生しやすいことが考えられる。

また、実際の受験後に「進学校出身者の中には、本人にとって残念な進路先になった場合、いわゆる難関大に合格した同級生たちから『上から目線』で、『気にするな』であるとか、『資格でも取ればいいだろ』であるとか、『学歴じゃないよ』などとアドバイスされることに苦痛を感じ、苦しんでいる人たちが現実にいる」と赤田（2009）<sup>(12)</sup>が指摘するように、進学校出身者は、自分が納得して設定した受験校に合格できなかった場合、所属した高校内で形成された価値水準とのギャップを認識させられる、いわば不本意感というメンタリティの形成を助長するような追い討ちが待っている。

大学入試自体については、数字上は大学全入時代に突入しているとはいえ、例えば平成27年度入試の場合、確定志願倍率が国立大学全体で4.3倍、公立大学全体で6.3倍<sup>(13)</sup>と、難易度や人気が高い大学については依然として厳しい競争が続いている。有名高校や進学校の出身者は、有名高校や進学校という準拠集団によって形成された価値水準に見合った大学に進学できれば問題はないが、実際には、準拠集団で形成された価値水準に見合わない大学に進学せざるを得ない者も多く存在している可能性が考えられる。つまり、有名高校や進学校という準拠集団に所属した場合、大学不本意入学の問題に直面する可能性が高まることが考えられる。

本稿の問題の所在は、①. 進学校出身者は非進学校出身者と比べ、大学、および学部・学科（専攻）への不本意入学となるリスクが高いのか、②. ①の場合、不本意入学となる学生にはどのような特性が見られるのか、③. 進学校出身の不本意入学者を減少させるにはどのような改善策があるのか、の三点である。

## 2. 高校生の志望校選定

### (1) 「相応」の志望校選定

大学入試における志望校の選定、および出願校の決定に際しては、「模試の判定結果 (70.5%)」<sup>(14)</sup>、「学校のレベル・偏差値が自分に合っている (47.0%)」<sup>(15)</sup>、など、いわゆる自己の受験時点での評定を客観的に加味して決定している傾向が見られる。つまり、受験する大学合格の可能性を高めるために自己の評定をもとに自己選抜をして出願校を決定していると考えられる。一方で、「高校の先生 (担任、進路指導担当の話) (66.4%)」、「友人との会話・相談 (54.8%)」<sup>(14)</sup> など高校内における人的接触による影響も大きいことが窺える。

竹内 (1995)<sup>(16)</sup> は、自分のこれまでの経歴を勘案して自分のような者はこの程度の目標を目指すべきだとするアスピレーション水準をホッパーが目標志向の中の一つに挙げた規範的期待水準とし、規範的期待水準は同じような境遇との人々との交流から形成されやすいとしている。また、岩木 (1980)<sup>(17)</sup> の「高校での進路選択では所属する学校の規定力が大きい」、斉藤 (1996)<sup>(18)</sup> の「学校間の違いにより大学志望動機は明確に影響を受ける」、望月 (2007)<sup>(19)</sup> の「『受験校選択』への影響力が大きいのは『学校・仲間環境』である」、中澤 (2008)<sup>(20)</sup> の「自分が所属する学校ランクに基づいて『それ相応の』選択を自ら行う」、荻谷 (1995)<sup>(21)</sup> の「日本の若者たちは、自分の『身のほど』をよくわきまえているようにみえる。(中略) 日本の高校生は、あやふやな夢など追い求めることができない。それほどまでに、大学に入れるかどうかを判定する能力についての、十分に明確な、夢や読み誤りを許さない情報が提供されている」などの指摘は、大学進学実績という文脈での規範的期待水準が各学校の教育活動全体の中で学校ランクに応じて形成され、自己選抜による志望校の選定を促進していることを示唆していると考えられる。

### (2) 自己選抜の揺らぎ

一方で、1987年に「個性重視の原則」を打ち出した臨時教育審議会の最終答申<sup>(22)</sup>や、1999年に「入れる大学」ではなく「入りたい大学」、「よい大学」よりも「自分に合った大学」、「やりたいことのできる大学」を主体的に進路選択する方向に意識と行動を転換することを促した中央教育審議会答申<sup>(23)</sup>は、大学進学に際してのミスマッチ、すなわち不本意入学や休学、中途退学などの減少を狙いとした施策であると考えられる。しかし、山田 (2001)<sup>(24)</sup> の「現代社会が『夢を持つことはよいことだ』というメッセージに満ちあふれているために、いくら非現実的であることがわかって、その夢を否定することは難しい。他人に対して、それが『無理』だということは、親であっても教育者、友人であっても言いにくい。本人が無理だと気づくまで待つしかない」、若松 (2012)<sup>(25)</sup> の「持っている個性を生かせる進路を志す志向への傾倒」や「それまでの学歴・学習歴や能力水準と合う進路か否かにかかわらず、本

人が『やってみたい・おもしろそう』と思うかが優先される」などの指摘は相応の志望校を客観的に選定できる自己選抜力を弱めていることを窺わせる。

このように先行研究からは、所属する高校という準拠集団内で形成された価値観によって、生徒は自己の評定と照らし合わせながら自己概念を修正していき「それ相応」の志望校や出願校を自己選抜によって選定していくが、一方で、偏差値重視の弊害として掲げられた個性重視の教育施策等による社会環境の変化が、「それ相応」の志望校や出願校を選定できない高校生を増加させている可能性があることが示唆された。

しかし、不本意入学者が自己の評定に応じた志望校を選定せず受験する傾向が見られるのかどうかについて実証した研究はこれまでにはない。本稿では、1章で指摘した有名大学を目指さなければならないという価値観が形成されやすいことが示唆される進学校に着目して、出身高校（進学校出身と非進学校出身）における大学志望順位と評定が不本意入学とどのような関連が見られるのかについて、大学に入学して間もないA大学B学部（社会科学系）の1年生を対象とした調査結果より考察する。

### 3. 不本意入学者の出身高校・志望順位・評定に関する調査分析

#### （1）調査概要

##### 【仮説】

進学校出身者は、非進学校出身者と比べ大学不本意入学者が多い。

##### 【調査対象と時期】

調査名称：大学生活アンケート

調査時期：2014年4月

対象：近畿地方に所在する私立4年制A大学B学部（社会科学系）に所属する1年生（ $n = 73$ ）。

A大学B学部は国公立大受験者との併願関係が存在し、入試競争倍率は2015年度入試で1.0倍を大きく上回っている。

方法：質問紙調査法（講義終了後に質問紙を配布し回答してもらい、その場で回収した）

##### 【質問項目】

- ① 出身高校
- ② 現在在籍する大学について、進学時点での志望度  
「第一志望」、「第二志望」、「第三志望以下」の3件法
- ③ 現在在籍する大学について、進学時点での本意度  
「とても本意」、「まあ本意」、「やや不本意」、「不本意」の4件法
- ④ 現在在籍する学部・学科（専攻）について、進学時点での本意度  
「とても本意」、「まあ本意」、「やや不本意」、「不本意」の4件法

⑤ 高校時代の評定について、学校内での平均的な位置

「上位」、「中位」、「下位」の3件法

【分析手法】

質問項目の①～⑤の回答結果を尺度化してクロス集計分析、および統計的手法による分析を行った。

- ① 出身高校：進学校群（ $n = 34$ ）と非進学校群（ $n = 39$ ）に分類。
- ② 大学志望度：第一志望群（ $n = 22$ ：「第一志望」）と第二志望以下群（ $n = 51$ ：「第二志望」・「第三志望以下」の和）に分類。
- ③ 大学本意度：本意群（ $n = 50$ ：「とても本意」・「まあ本意」の和）と不本意群（ $n = 23$ ：「やや不本意」・「不本意」の和）に分類
- ④ 学部・学科（専攻）本意度：本意群（ $n = 58$ ：「とても本意」・「まあ本意」の和）と不本意群（ $n = 15$ ：「やや不本意」・「不本意」の和）に分類
- ⑤ 高校時代の評定：上位（ $n = 13$ ）、中位（ $n = 41$ ）、下位（ $n = 14$ ）に分類。

(2) 調査結果

① 出身高校と大学、学部・学科（専攻）本意度との関係

出身高校（進学校群と非進学校群）と大学進学時点での本意度（本意群と不本意群）を、大学本意度、学部・学科（専攻）本意度別にクロス集計した（Table1）。

Table1：出身高校と入学本意度のクロス集計表（ $n = 73$ ）

	進学校群	非進学校群	合 計		進学校群	非進学校群	合 計
大学	16	34	50	学部・学科（専攻）	24	34	58
本意群	47.1%	87.2%	68.5%	本意群	70.6%	87.2%	79.5%
大学	18	5	23	学部・学科（専攻）	10	5	15
不本意群	52.9%	12.8%	31.5%	不本意群	29.4%	12.8%	20.5%
合 計	34	39	73	合 計	34	39	73
	100.0%	100.0%	100.0%		100.0%	100.0%	100.0%

%は、進学校群、非進学校群のそれぞれの本意群と不本意群の合計を100%とした場合の割合を示す

クロス集計の結果からは、大学本意度について、進学校出身者では不本意群の割合が52.9%と本意群の47.1%を上回ったのに対し、非進学校出身者では本意群の割合が87.2%と不本意群の12.8%よりも圧倒的に高い傾向が見られた。また、学部・学科（専攻）本意度については、大学本意度と比較した場合、進学校出身者、非進学校出身者とも本意度の割合が高かった。

次に、進学校出身者・非進学校出身者と本意群・不本意群との間に関連性があるかどうかを統計的に確認するためカイ二乗検定を行ったところ、出身高校と大学本意度との間に1%水準で有意差が見られ、大学に本意、または不本意で入学した学生数と出身高校の間には関連性があることが確認された（Table2）。一方で、学部・学科（専攻）に本意、または不本意で入学した学生数と出身高校の間に関連性は見られなかった。

Table2：出身高校と入学本意度の関連についての検定結果（カイ 2 乗検定）

<大学本意度>				<学部・学科(専攻)本意度>			
カイニ乗値	自由度	P 値	判 定	カイニ乗値	自由度	P 値	判 定
13.5489	1	0.0002	**	3.0627	1	0.0801	

\*\*：1% 有意 \*：5% 有意

## ② 大学志望順位と大学本意度、学部・学科（専攻）本意度との関係

まず本調査結果の特徴として、調査対象のA大学B学部の学生における進学校出身者については、第一志望での入学者が約1割（11.8%）しか存在していないことが挙げられる。非進学校出身者の46.2%と比べても第一志望での入学者が少ないことがわかる。

次に、大学志望度と大学本意度との間について、第一志望校であれば本意入学となり、第二志望校以下であれば不本意入学となりやすい関連性が存在することは竹内（2014）<sup>(26)</sup>が明らかにしているが、本調査において出身高校（進学校群と非進学校群）別に大学の志望順位と本意度との関係を調べたところ、進学校出身者、非進学校出身者とも、第一志望校における大学不本意入学者は存在しなかった(Table3)。一方、第二志望校以下の入学者について、進学校出身者では大学不本意入学者の割合が60.0%と本意入学者の40.0%よりやや多い一方で、非進学校出身者では第二志望以下での不本意入学者が23.8%と本意入学者の76.2%よりも圧倒的に少ない割合となった。小林（2000）<sup>(27)</sup>は、「不本意入学」の発生時期を大学「入学時」と「入学後」という二つの時間軸からそれぞれ類型化し、大学「入学時」については、重なりは承知の上と前置きをした上で、「第一志望不合格型」、「合格優先型」、「就職優先型」、「家庭の事情型」、「学歴目的型」の5つに類型化しているが、少なくとも本調査結果からは、「第一志望不合格型」の不本意入学者は、進学校出身者に多く存在することが確認された。

なお、Table3の非進学校群について、大学本意度と学部・学科（専攻）本意度のクロス集計表の数値が一致しているが、被験者個々の回答が全て同一であった訳ではなく、集計結果として一致したものである。

Table3：出身高校別 志望度と本意度のクロス集計表

<進学校群>				<非進学校群>			
	第一志望	第二志望以下	合 計		第一志望	第二志望以下	合 計
大学	4	12	16	大学	18	16	34
本意群	100.0%	40.0%	47.1%	本意群	100.0%	76.2%	87.2%
大学	0	18	18	大学	0	5	5
不本意群	0.0%	60.0%	52.9%	不本意群	0.0%	23.8%	12.8%
合 計	4	30	34	合 計	18	21	39
	100.0%	100.0%	100.0%		100.0%	100.0%	100.0%

  

<進学校群>				<非進学校群>			
	第一志望	第二志望以下	合 計		第一志望	第二志望以下	合 計
学部・学科(専攻)	3	21	24	学部・学科(専攻)	18	16	34
本意群	75.0%	70.0%	70.6%	本意群	100.0%	76.2%	87.2%
学部・学科(専攻)	1	9	10	学部・学科(専攻)	0	5	5
不本意群	25.0%	30.0%	29.4%	不本意群	0.0%	23.8%	12.8%
合 計	4	30	34	合 計	18	21	39
	100.0%	100.0%	100.0%		100.0%	100.0%	100.0%

%は、出身高校群別の入学への本意度について、大学の志望順位ごとの合計を100%とした場合の割合を示す

次に、進学校出身者・非進学校出身者それぞれについて、大学志望度と入学への本意度との間に関連性があるかどうかを統計的に確認するためカイ二乗検定を行ったところ、進学校出身者の大学志望度と大学本意度、非進学校出身者の大学志望度と大学本意度、非進学校出身者の大学志望度と学部・学科（専攻）本意度との間にそれぞれ5%水準で有意差が見られた（Table4）。進学校出身者について、大学志望度と大学本意度との関連性がある点は先行研究で明らかにされた知見と一致しているが、非進学校出身者については、大学志望度と学部・学科（専攻）本意度との間にも関連性があることが確認できた。ただし、それぞれ関連性があると言っても、進学校出身者の大学志望度と大学本意度については、大学志望度が第二志望以下になれば大学不本意入学になりやすいという関連性である。一方の非進学校出身者は進学した大学が第一志望、第二志望以下の如何に関わらず、大学、学部・学科（専攻）への本意度が高くなる傾向があるという関連性であり、関連性の内容が進学校出身者と非進学校出身者では異なっている。

Table4：志望度と本意度との関連についての検定結果（カイ2乗検定）

<進学校群・大学本意度>				<非進学校群・大学本意度>			
カイ二乗値	自由度	P 値	判 定	カイ二乗値	自由度	P 値	判 定
5.1000	1	0.0239*		4.9160	1	0.0266*	

  

<進学校群・学部・学科(専攻)本意度>				<非進学校群・学部・学科(専攻)本意度>			
カイ二乗値	自由度	P 値	判 定	カイ二乗値	自由度	P 値	判 定
0.0425	1	0.8367		4.9160	1	0.0266*	

\*\*：1%有意 \*：5%有意

### ③ 出身高校群での評定と大学本意度、学部・学科（専攻）本意度との関係

出身高校群別に高校時代の準拠集団内での相対的評定と不本意入学の関係を調べたところ、進学校出身者では大学不本意入学者の83.3%が評定において中下位層に位置する結果となった。一方、非進学校出身者では大学に不本意感を持って入学した5人のうち4人が高校時代は評定が相対的に上位に位置していた（Table5）。これらの傾向が、統計的に関連性があるのかどうかをカイ二乗検定によって検証したところ、出身高校（進学校群と非進学校群）と大学不本意入学の学生数との間に5%水準で有意差が見られた（Table6）。進学校出身者では評定における中下位者層、非進学校出身者では評定における上位者層に大学不本意入学の割合が高い傾向があることが窺える。

Table5：出身高校の評定と不本意入学者のクロス集計表

	進学校 大学不本意	非進学校 大学不本意		進学校 学部・学科不本意	非進学校 学部・学科不本意
上位	3 16.7%	4 80.0%	上位	1 10.0%	2 40.0%
中位	9 50.0%	1 20.0%	中位	5 50.0%	3 60.0%
下位	6 33.3%	0 0.0%	下位	4 40.0%	0 0.0%
合 計	18 100.0%	5 100.0%	合 計	10 100.0%	5 100.0%

%は、進学校群、非進学校群の不本意度について、それぞれの評定における層の合計を 100%とした場合の割合を示す

Table6：出身高校の評定と不本意入学者の関連についての検定結果（カイ 2 乗検定）

<大学不本意入学>				<学部・学科(専攻)不本意入学>			
カイ二乗値	自由度	P 値	判 定	カイ二乗値	自由度	P 値	判 定
7.6338	2	0.0220 *		3.5625	2	0.1684	

\*\*：1% 有意 \*：5% 有意

### （3）結果の整理

以上のことを整理すると、調査結果から明らかになったのは以下の三点である。

一点目は、進学校出身者は非進学校出身者と比べ、第一志望で大学に入学している割合が低く第二志望以下になると大学不本意入学となりやすいのに対し、非進学校出身者は第二志望以下でも大学入学への本意度が高いメンタリティを持つ割合が高いことである。

二点目は、進学校出身者の大学入学への不本意感というメンタリティを持つ者の特徴として、高校時代の評定は所属する集団の中で相対的に中下位層に位置する傾向が見られたことである。

三点目は、学部・学科（専攻）不本意入学者は進学校出身者、非進学校出身者とも大学不本意入学者と比べると少ないという点である。

一点目については、森（2013）<sup>(28)</sup>の「入学者の中で、第一志望の大学に入学し、入学直後から学習の動機付けにあふれている新入生は多くはない」、前述した竹内（2014）<sup>(26)</sup>の「志望度と本意度の間には、第一志望校であれば本意入学となり、反対に第二志望校以下であれば不本意入学となりやすい関連性が存在している」の指摘と一致しているが、本稿ではその傾向は進学校出身者に見られることを明らかにした。

また、荻谷（1991）<sup>(29)</sup>が、高校生の職業選抜という観点から、学校の中で生徒は自己の能力や評定を認識しながら日常的な教育活動の中で自己選抜が促され、アスピレーションのコントロールという点で無駄のない効率的な配分を実現していることを指摘しているが、この点は、就職希望者が存在し、第二志望以下でも大学入学への本意度が高いメンタリティを持つ非進学校出身者の多くに当てはまっていることが示唆された。



#### (4) 考察

先行研究、および調査結果を踏まえ、以下の三点について考察したい。

一点目は、進学校出身と大学不本意入学の学生数の関係である。森(2013)<sup>(30)</sup>が「不本意入学といっても、学びたい内容、大学ブランド、大学の所在地などのいくつかの要因が複雑に組み合わさることから、不本意のレベルはいろいろである」と指摘しているように、進学校出身であることが不本意入学の単独の要因になることは考えにくい。また、受験生本人の能力と志望校選定の乖離が、所属する学校集団とは関係のない個人の意志に起因するケースも多いと考えられる。しかし、進学校出身ということが大学不本意入学となりやすい要因の一つである可能性については本調査の結果より示唆されたと考える。2章で示した望月(2007)<sup>(15)</sup>の『『受験校選択』への影響力が大きいのは『学校・仲間環境』である」、竹内(1995)<sup>(12)</sup>の規範的期待水準は同じような境遇との人々との交流から形成されやすいという指摘を踏まえると、大学ブランド・偏差値という観点から見た場合、進学校出身者は非進学校出身者と比べ、準拠集団内で形成される高いアスピレーション水準に縛られやすく、自己選抜によって実現可能なレベルにコントロールする機能が作用しにくい、すなわち、大学受験時までに自分の実力に見合った相応の第一志望校が選定できにくく、不本意感というメンタリティを持って大学に入学する可能性があることが考えられる。

一方、非進学校出身の場合、大学という志望校の選定においては、準拠集団内で形成されるアスピレーション水準が進学校と比べると低くなることに加え、高校入学段階、あるいはそれ以前の段階ですでに競争の残る難易度が高い大学入学の可能性については自己選抜が行われている可能性が考えられる。

二点目は、進学校出身と学部・学科(専攻)不本意入学の学生数との関係である。調査結果からは、学部・学科(専攻)に本意、または不本意で入学した学生数と出身高校の間に関連性は見られなかった。また、大学本意度と比較した場合、進学校群、非進学校群とも本意度の割合が高く、進学校出身の第二志望以下の大学への入学であっても70%(21人)は、学部・学科(専攻)への入学については本意であった。豊嶋(1989)<sup>(31)</sup>が「学部を決めてから入れる大学を選ぶという進路方略が一般化している」と指摘しているように、高校での学部・学科(専攻)選択を大学選択よりも優先した進路指導の定着により、学部・学科不本意入学者は大学不本意入学者よりも少ないと考えられる。また、学部・学科(専攻)選択は、大学選択と比べた場合、自己の評定に応じて検討できることも学部・学科不本意入学者が大学不本意入学者よりも少ない要因と考えられる。大学選択の場合、まず志望する大学の難易度があり、その大学に自分自身の評定と折り合いがつけられるかどうかという検討が必要となるが、学部・学科(専攻)選択の場合は、国公立大学医学部医学科のようななどの大学でも難易度が非常に高い一部の学部・学科(専攻)を除き、幅広い難易度の中から選択が可能となるからである。

一方で、日本の大学の学部数は、2008年度時点で国公立大学を合わせ2374学部存在す

る<sup>(32)</sup>ことを考えると、いくら高校での学部・学科研究が重視されているとはいえ、とてもすべての学部・学科の内容を高校3年間で把握した上で自分自身に適した希望の学部・学科（専攻）を選択することは難しく、調べることができた範囲の中から学部・学科（専攻）を選択している高校生が多いことが考えられる。従って、医学部医学科や教員養成系統の学部などその学部・学科や専攻に進学しなければ希望する職業に就くことができない資格直結型の学部・学科（専攻）を除き、高校生の志望学部・学科（専攻）に対する不本意感は、大学入学後の新たな学問分野への接触の中で気付くケースが多く、大学入学時点では志望大学ほど持ちにくいことが示唆される。

三点目は、進学校出身者の本意度と志望度の関係である。調査結果からは、進学校出身者は第二志望以下の大学になると大学不本意入学となるリスクが大きい一方で、非進学校出身者は第二志望以下でも大学不本意入学となるリスクが低いことが示唆された。

一方で、第一志望ではない、すなわち第二志望以下であっても不本意入学ではない学生数も一定数存在していることもわかった。特に進学校出身者については、大学本意者の中の75%（12人）が第二志望以下で入学しており、非進学校出身者の47%（16人）と比べて高い割合となった。この要因を考察するため、第二志望以下の大学に入学し大学本意群に属する学生（進学校出身12人と非進学校出身16人）の学部・学科（専攻）の本意度を調べたところ、進学校出身では83%にあたる10人が、非進学校出身では88%にあたる14人が学部・学科（専攻）について本意入学であることが確認できた。今回の調査に限って言えば、学部・学科（専攻）選択での納得感が高まれば、第一志望の大学でなくとも不本意入学となるリスクを減らせる可能性が高まることが示唆された。

#### 4. 不本意入学者数減少のための改善策の検討

進学校出身者について、高校3年間の中で自己の評価を踏まえた納得度の高い第一志望校の選定ができるかどうか大学不本意入学を回避する一つの鍵となることは先行研究で示した通りである。そのためには、生徒の自己概念を修正させるより多くの自己選抜の場の検討が必要であることが、非進学校出身者の自己選抜の促進による大学本意感の形成の可能性より示唆された。本稿ではそのための一つの施策として進学校における学級単位でのバンディング型習熟度別編成<sup>(33)</sup>の推進による生徒の自己の評価に対する自己概念の修正力強化の可能性を指摘したい。

耳塚ほか<sup>(34)</sup>は、学校が教育活動の様々な機会を通じて、生徒に自分の評価や能力を自覚させ、各生徒にふさわしいトラックへ生徒を振り分ける学業分離化に注目した上で、「学業分離化の程度を高くすることにより、生徒は自己の評価を十分認識し、自分の学業的能力の自己概念を修正し、それに見合った進路志望へと方向づけられる一方で、学業的分離化の程度が低い学校では、能力の自己概念の修正はわずかしが行われず、その結果、入学時ないし

はそれ以前からの進路志望をそのまま維持することになる」ことを指摘している。つまり、大学受験時の最終的な志望校の選定に影響を及ぼすのは生徒本人による主体的な修正力以上に、高校の学業分離化の程度に起因していることが示唆される。竹内(1995)<sup>(35)</sup>は「高校におけるアスピレーションの加熱と冷却はトラック間ではなくトラック内部に生じる」と述べているが、高校という準拠集団内で形成されるトラッキングシステムの働きが弱い場合、生徒の大学入試時点での実力と入学への納得感を持つことができる志望校選定の調整機能が作用せず、自己の評定と照らし合わせた合格可能性の見込みがある志望校を選定することを困難にしていると考えられる。

トラッキングシステムの日本の高校教育における社会的機能(特に選抜機能)については、菊池(1987)<sup>(36)</sup>が高校の階層構造と硬直的な習熟度別学級編成を代表例として挙げ、その習熟度別学級編成について天野ほか(1986)<sup>(37)</sup>は、全国規模の調査より全国普通科高校の45.4%が習熟度別学級編成を取り入れていることを明らかにしている。つまり、高校には階層構造が高校間と高校内にあり、アスピレーションの加熱と冷却が生じるのは高校内であるが、習熟度別学級編成によってアスピレーションの加熱と冷却に対処している高校は半数弱に留まっているということになる。

一方で、中西(2013)<sup>(38)</sup>は「少子化の中で、高校は相対的に上位校の定員を多めに確保し、普通科高校を中心にセカンドランク以下の高校の生徒数を減少させることによって、学校数を維持してきた」と、従来よりもトップ校に進学できる生徒の裾野が広がったことを指摘している。また、牧野ほか(2001)<sup>(39)</sup>は、高校での授業を理解できない割合を大学進学率の高さから高校をA～Dの4ランクに分け、最も大学進学率が高いAランクの高校でも約35%の生徒が授業を理解できていない実態を示している。高田(2008)<sup>(40)</sup>も牧野ほかと同様の調査を行ない、トップ進学校の生徒でも授業を理解できているのは46.6%と半数以上の生徒が授業についていけないことを明らかにしている。

ここから読み取れるのは、一般的に高校の授業は全員が理解できるような難易度・進度には設定されていないということである。トップ進学校でも、3～5割程度の生徒が授業を理解できておらず、その割合は入学者層の裾野の拡大でさらに増加していることが考えられる。そのため、従来はトップ進学校に入学できなかった可能性の高い裾野の拡大の恩恵を受けたトップ進学校の生徒たちは、入学後、早々に高校内で評定が下位層に位置し早期にクールアウトしてしまう確率が高まることになる。しかし、トップ進学校に入学したからには有名大学を目指したいという準拠集団が形成する規範的期待水準の中で、志望校に対するアスピレーション水準だけは維持され、自己の評定と照らし合わせた志望校の選定が一層困難さを増すことが示唆されるのである。従って、評定と志望校選定の乖離・独立を防止するシステムとして学級単位でのバンディング型の習熟度別編成の推進は有効だと考える。

この学級単位でのバンディング型の習熟度別編成の導入により、トップ進学校で評定が下位層に位置する生徒たちは、学校の評定という文脈における自分自身の校内での位置を自覚

せざるを得なくなる。前述した梶田が指摘したまなざしについても、少なくとも高校内においては、有名大学や難関大学に進学しなければならないというまなざしは弱まり、自己概念の修正が進みやすくなることが期待できるだろう。

一方で、3章で指摘した学部・学科（専攻）選択の納得感が高まれば、大学が第一志望でなくとも不本意入学となるリスクを減少させることができる可能性を考えた場合、習熟度別クラス編成の学習によって自己選抜を行ないながら、将来を見据えた学部・学科（専攻）について熟考することが、大学のブランド・偏差値にこだわらない自分らしい進路選択につながることとなり、不本意入学をより回避できる可能性を高めると考えられる。

## 5. 本稿の意義と課題

本稿では、大学不本意入学となりやすい一つの要因として進学校出身者に着目した。本稿の意義は、進学校出身者は非進学校出身者と比べ、第一志望で大学に入学する割合が低く第二志望以下での入学になると不本意入学となりやすいことを明らかにし、進学校出身の不本意入学者は高校時代の評定が中下位層に多い傾向があることを示した点である。また、大学不本意入学者の特性として出身高校と自己選抜の関係にアプローチし、自己選抜を促進するためのバンディング型習熟度別クラス編成の推進に言及した点には独自性があると考えられる。

しかし、本調査はA大学B学部（社会科学系）という近畿圏の国公立大学と併願関係がある中堅私立大学の文系学部の学生を対象とした調査結果であり、この結果が進学校出身者の普遍的な特性とは言い切れない。また、進学校出身と大学不本意入学の学生数との関係を検討していくにあたっては、高校教育段階との関連性だけでは不十分であり、進学校に入学する以前の義務教育段階での評定や高校入試における受験校の選定との関連性も考察する必要があると考える。これらの点については、今後の研究課題としたい。

\* アンケート調査で得たデータにつきましては、A大学の倫理委員会での審議・承諾を得た上で利用しています。

### [注]

(1)・(2) 本論文における「進学校」・「非進学校」の定義については、河村・藤原(2010)<sup>(3)</sup>の大学進学率が80%以上、大久保(2005)<sup>(4)</sup>の大学進学率が90%以上をそれぞれ「進学校」と示したことに依拠し、両者が示す下限値の大学進学率80%以上を「進学校」、80%未満を「非進学校」とした。また各被験者(n=73)の出身校における2015年3月卒業生の「高校3年時の在籍人数」と「大学進学者数」を調べ、(大学進学者数/高校3年時の在籍人数)×100(%)より大学進学率を算出し、80%以上を「進学校出身」、80%未満を「非進学校出身」として分類した。

(3) 河村茂雄・藤原和政(2010)「高校生の学校適応を促進するための援助に関する研究－学校タイプ、学校

- 生活満足度の観点から」、学校心理学研究 10(1), 53-62
- (4) 大久保智生 (2005) 「青年の学校への適応感とその規定要因－青年用適応感尺度の作成と学校別の検討－」, 教育心理学研究, 53, 307-319  
(2015年9月7日最終アクセス)
- (5) 岩井勇児 (1984) 「愛知教育大学学生の進路意識：V」, 愛知教育大学研究報告 (教育科学編), 33, 77-94
- (6) 豊嶋秋彦 (1989) 「大学生の不本意感と適応過程」, 東北学院大学教育研究所紀要, 8, 57-78
- (7) 寺崎昌男 (2010) 「自校教育の役割と大学の歴史－アーカイブスの使命にふれながら」, 金沢大学資料館紀要, 5, 3-11
- (8) 大学収容力 (%) は、文部省、文部科学省「学校基本調査」(各年度)の数値に依拠し、「当該年度の大学入学者数/当該年度の大学志願者数」より算出した。  
< [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/attach/\\_icsFiles/afieldfile/2012/06/28/1322874\\_2.pdf#search='%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E9%80%B2%E5%AD%A6%E7%8E%87+%E5%8F%8E%E5%AE%B9%E5%8A%9B+%E6%8E%A8%E7%A7%BB'](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/attach/_icsFiles/afieldfile/2012/06/28/1322874_2.pdf#search='%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E9%80%B2%E5%AD%A6%E7%8E%87+%E5%8F%8E%E5%AE%B9%E5%8A%9B+%E6%8E%A8%E7%A7%BB') >  
< [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/gijiroku/06101201/003/002.pdf#search='%EF%BC%99+%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E9%80%B2%E5%AD%A6%E7%8E%87+%E5%8F%8E%E5%AE%B9%E5%8A%9B+%E6%8E%A8%E7%A7%BB'](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/gijiroku/06101201/003/002.pdf#search='%EF%BC%99+%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E9%80%B2%E5%AD%A6%E7%8E%87+%E5%8F%8E%E5%AE%B9%E5%8A%9B+%E6%8E%A8%E7%A7%BB') >を参照  
(2015年9月19日最終アクセス)
- (9) 中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育, 大学教育, 大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～」  
2014年12月22日 5-8.
- (10) 竹内正興 (2014) 「大学入試構造と不本意入学者のアイデンティティ」, 佛教大学大学院紀要教育学研究科編, 42, 36-41
- (11) 梶田毅一 (1983) 「学歴研究のひとつの課題－まなざしと自己概念の視点から」, 『教育社会学研究』, 第38集, 34
- (12) 赤田達也 (2009) 『学歴ロンダリング実践マニュアル』, オクムラ書店, 47
- (13) 文部科学省 (2015) 『平成 27 年度国公立大学入学者選抜確定志願状況』  
< [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/27/02/1355340.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/02/1355340.htm) >  
(2015年9月24日最終アクセス)
- (14) 岡部悟志 (2013) 『高校データブック 2013』, Benesse 教育研究開発センター, 第5章, p.89
- (15) JS コーポレーション (2012) 『高校生白書 2012 年』, 2012 年 7 月  
< <http://www.rbbtoday.com/article/2012/11/05/97241.html> >  
(2015年9月19日最終アクセス)
- (16) 竹内洋 (1995) 『日本のメロクラシー－構造と心性』東京大学出版会, 73-75
- (17) 岩木秀夫 (1980) 「中・高校生の学校生活と進路形成－中等教育の構造と機能に関する研究 (1)」, 東京大学教育学部紀要 20, 82
- (18) 斉藤浩一 (1996) 「大学志望動機の高등학교間格差に関する実証的研究」, 進路指導研究, 17, 1, 34
- (19) 望月由起 (2007) 「高校生の『入学校選択』に対する他者の影響」, キャリアデザイン研究, 3, 140
- (20) 中澤渉 (2008) 「進学アスピレーションに対するトラッキングと入試制度の影響」, 東洋大学社会学部紀要, 46-2, 81
- (21) 荻谷剛彦 (1995) 『大衆教育社会のゆくえ－学歴主義と平等神話の戦後史』, 中公新書, 4-5

- (22) 文部科学省（1993）『我が国の文教施策－文化発信社会に向けて 第2部 文教施策の動向と展開 第1章 文教施策の総合的推進 第2節 教育改革の推進臨時教育審議会の答申－教育改革の三つの視点－』  
< [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/hpad199301/hpad199301\\_2\\_081.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad199301/hpad199301_2_081.html) >  
(2015年8月6日最終アクセス)
- (23) 文部科学省（1999）『初等中等教育と高等教育との接続の改善について（中教審答申）第5章 初等中等教育と高等教育との接続を重視した入学者選抜の改善 第3節 これからの選抜の在り方 （1）大学と学生とのより良い相互選択を目指して』  
< [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chuuou/toushin/991201f.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201f.htm) >  
(2015年8月19日最終アクセス)
- (24) 山田昌弘（2001）『家族というリスク』，勁草書房，105
- (25) 若松養亮（2012）「大学生のキャリア選択をみてみよう－環境はどう変わったのか」，若松養亮・下村英雄編（2012）『詳解 大学生のキャリアガイダンス論－キャリア心理学に基づく理論と実践』金子書房，11
- (26) 竹内正興（2014）「大学入試構造と不本意入学者のアイデンティティ」，佛教大学大学院紀要教育学研究科編，42，46
- (27) 小林哲郎（2000）「大学・学部への満足感 学歴・転学部・編入・再受験」，小林哲郎 高石恭子 杉原保史（編）『大学生がカウンセリングを求めるとき』，ミネルヴァ書房，4，61-72
- (28) 森朋子（2013）「初年次セミナー導入時の授業デザイン」，『初年次教育の現状と未来』初年次教育学会編，世界思想社，11章，165
- (29) 荻谷剛彦（1991）『学校・職業・選抜の社会学－高卒就職の日本的メカニズム』東京大学出版会，103-115
- (30) 森朋子（2013）前掲書，165-166
- (31) 豊嶋秋彦（1989）前掲書，64
- (32) 文部科学省（2008）『学校基本調査 平成20年度 高等教育機関（報告書掲載集計）学校調査 大学・大学院 大学の学部数』，e-Stat 政府統計の総合窓口  
< <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001015830> >
- (33) バージェス (Burgess) によれば、一連のテストや教員の評価にもとづいて、同一年齢童・生徒の能力によって異なる学級に分けることをストーリーミングといい、特定の教科に関して、その教科の能力にもとづいて児童・生徒をいくつかの授業学級に分けることをセッティングという。これに対してバンディングは児童・生徒を、平均以下、平均、平均以上といった幅広い能力集団に分けて学級を編成する方式を指す。  
< [http://sports.geocities.jp/selfcontrol\\_teacher/ed8.html](http://sports.geocities.jp/selfcontrol_teacher/ed8.html) >を参照  
(2015年9月10日最終アクセス)
- (34) 耳塚寛明・荻谷剛彦・樋田大二郎（1981）「高等学校における学校活動の組織と生徒の進路形成－高校生の生徒文化と学校経営（2）」東京大学教育学部紀要 21，36-37
- (35) 竹内洋（1995）前掲書，108-109
- (36) 菊池栄治（1987）「習熟度別学級編成の社会学－社会的構成過程序説－」，東京大学教育学部紀要 第27巻，239-240
- (37) 天野郁夫・耳塚寛明・樋田大二郎・菊池栄治・酒井朗（1986）「高等学校における学習習熟度別学級編成に関する研究」，東京大学教育学部紀要第26巻，30-31
- (38) 中西啓喜（2013）「日本型トラッキングシステムの変容－トラッキング構造の二極化による学歴格差再生産機能－」，青山学院大学教育学研究科 博士学位論文，72

- (39) 牧野暢男・藤田英典・渡辺秀樹・耳塚寛明・清水賢二・岩木秀夫・千葉聡子・村松幹子 (2001) 「青少年の規範学習と逸脱抑制に関する研究」, 公益財団法人日工組社会安全財団, 5, 49-50
- (40) 高田正規 「高校生の学習意識と学習行動」, ベネッセ教育研究開発センター 『学生満足度と大学教育の問題点 2007 年度版』 第3章, 78

(たけうち まさおき 教育学研究科生涯教育専攻博士後期課程／満期退学)

(指導教員：原 清治教授)

2015 年 9 月 28 日受理

